

---

# 迷探偵 柏木 王木

蔵元

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷探偵 柏木 王木

### 【Nコード】

N9738X

### 【作者名】

蔵元

### 【あらすじ】

未来の日本で横行するより物騒な事件をだめだめで頼珍漢な自称名探偵が解決するわけでもなく総ての事件を迷宮入りにするという自称探偵小説です。

迷宮入りするけどみんななんだかんだで幸せになる予定です・・・

## 1、序章 殺人夢想（前書き）

初めまして、蔵元といます。

この小説はグロテクスな描写と生々しい表現が含まれています。苦手な人は読まないほうがいいです。

文章が拙いのがダメ〜ムリ〜な人も読まないほうがいいと思います。少々文章力が無くてもおkに釣られて小説を書いたのでまさにそんな感じですよ。それでも一生懸命面白くするつもりなのでぜひ読みたい人は読んでください。

## 1、序章 殺人夢想

### 1、序章

そう、それは確か昨日のことだったような気がするのだが、記憶があやふやではつきり思い出すことができない。まるで頭の中に靄が掛かっているようで昨日のこと以外の記憶も思い出すことに終始苦勞している自分がいる。だが、その原因がわからないでもない。

一番に考えられる原因は酒の飲みすぎによる二日酔いである。

自分は無類の酒好きでよく飲みすぎことがある、健康のために飲む量を控えようとは考えているのだが何せ酒以外に逃げ場がない。30歳にもなつてアルバイトで生計を立てている自分にはもうすでに酒以外に楽しみが無いのだ。

だから、安酒をこれでもかと飲んでしまう。飲んでなきややっていられないとはこのことだ。記憶が飛ぶまで飲んだことなんて……

・あゝ思い出せない。

頭をかきしむしり、敷いた布団に寝転ぶ。

布団を敷いた畳は茶色にくすんでおり、体重を掛けるたびにミシミシと悲鳴を上げる。ここは家賃3万のぼろアパートの二階、壁も床も薄い、隣の喧騒や下の階の話し声がりアルに聞こえるくらい極薄だ。

壁というより、ついたてのほうが正しい。

だから、お隣さんやアパートの住人に俺が何時ぐらいに帰ってきたかを聞けば万事OKなのだが、

情けないことに気軽にそんなことを聞けるほどご近所付き合いがよくない。

しかたないので、すっぱりと抜けた記憶を寝ぼけた頭で一生懸命思

い出そうとするが、思い出そうとするたびに頭の中をノイズが走る、その日の記憶だけふわふわと脳内から逃げていく。いつもの二日酔いとは違う気がした。

そして、あまりに記憶の手がかりが少なすぎる、酒のおいがまったくしないことにもさつき気づいたばかりだ。やっとの思いで思い出したとしても、掠れに掠れた残像や軽く香る程度の感触しか得ることができなかった。

夜道をぶらぶらと歩いているのと、知らない建物に入っていく自分の姿。

足取りはおぼつかない、完全に千鳥足だ。

得られた情報から鑑みるに、俺は無意識のうちに夜中を徘徊していたようだ。

その時俺は今まで生きて中で感じたことが無いくらいいい気分だったような……気がする。

それは、まるで夢を見ているようで、誰かに支配されているようで、他人事のようにだった。

その意識を支配するのは心地のよい眠気とも言え表せるし、麻薬をしたまぶち込まれたときの感覚といっても過言ではないし、酒や飯をたらふく食ったときに得られる満足感と同一であるとも言えた。

ようはとても気分が良かったことに変わりはないのだけどそれがまともな快樂ではない無いたともなんとなく理解した。

これはまずい、夢遊病という奴だろうか。

月明かりが照る真夜中に、いつの間にか体が無意識のうちに動いて、俺自身がそれをまったく覚えていないというのはいささか病的すぎやしないか。

ただ唯一の救いとすれば、人に迷惑を掛けなかったことだろう……

。。  
+++++

目はぎらつく、足は煮え立つ、胸は焼けてしまうほどに熱く、体全体から蒸気が出てきそうだ。

それなのに、目の前がぼやける、頭に血が上りすぎて目まで血が入っていないのだろうか。

口はだらしなく開き、よだれが垂れ吐く息は白く、歩くたびに後ろになびく。

あたりは真っ黒で一寸先もわからない。

俺がどんな奴だったかもわからない。

俺が何をしているのかもわからない。

必死に思い出そうとするが、思い出し方も忘れてしまったらしい。

頭の中がかけらもかたまりもまとめて消し飛んでいた。

もう、思い出すことが面倒くさい、面倒くさい。

こんな風にHighな気分ときは、何も考えずにいるのが一番だ。頭がボーっとしている最中にも体はガチャガチャと動き出す。

地に足をたたきつけるように踏み出す、

「ダン！」と高らかに鳴り響き寝静まった夜道をにぎやかに。

雄雄しく、規則正しく、礼儀悪く、踏み鳴らす。

機械じみたその動きは、ロボットよりもロボットらしかった。

俺の体はあらかじめ組まれたプログラムにしたがって、正確に動き出す。

目の前にいる標的に向かって・・・。

「やめろ！やめてくれ。自分はまだ死にたくない！」

青いものが何か言っているようにも見えるが、俺には関係ないことだ。

俺はプログラムを忠実に守っているだけ。

それは俺じゃなくて、ソフト本体に言ってくれ。

ハードは一挙一動すべてにおいて、プログラム通りに人を解体する

だけ。

実に簡単だ。

「さあ、最後の仕上げをしようじゃないか。

醜い断末魔をあげて死んでくれ。」

プログラムに指定された台詞を呟いて、思いっきり得物を振り上げる。

耳の奥で男の断末魔が聞こえたような気がした。

## 1、序章 殺人夢想（後書き）

ここまで読んでいただいた方本当にありがとうございます。  
週一周期ででうpするつもりなのでよかったですら読んでくださいお願い  
します。

## 2、不運な朝（前書き）

この回はとてもグロイので、ムリな人は読まないほうがいいです!!

そこんところよろしくお願いします!!

## 2、不運な朝

私は名探偵柏木 王木。誰もが知っているわけではないが知っている人は知っている平成と言う混沌の世に出でた名・探・偵である。そう・・・名・探・偵である！

大切なことだから二回言わせた貰った。よく私のことを名探偵じゃなく迷探偵だなど呼ぶ輩がいるから尚なほの事二回言っておかなくてはいけない。

して、私は名探偵でありながら女子高校生でもある。神橋高等学校212に在籍だから、正しくは名女子高校生探偵のだがゴロが悪いので省略しているのだ。高校生の身でありながら名探偵だなんて・・・私かつこよすぎじゃないか！

自分の才能が恐ろしいとはこのことだ、そのうち私の自伝が小説になるかもしれないな。

なったらなっただで重版に重版を重ねその年のベストセラーになり、当然のことながら映画化決定でそれも大ヒット！！

サイン・握手会やら講演会で大忙し「うっへっへ」笑いが止まらない。

それともうひとつ大事なことを忘れていた。私の容姿のことだ。

自分自身で言うのもあれだが私は美少女だ。少しばかり高身長な気があるがそれを除けばパーフェクトだと自負している。

髪型は腰まで届くストレートの髪をポニーテイルにしているキリッとした顔にベストマッチだ。

足も長くよくモデル体形だと他人から言われたことはないが自分では大いにそう思っている。胸も人前以上にあるしくびれもきゅっと締まっているから将来探偵と兼業してモデルもするかもしれない、いや待てよ・・・自伝が映画化する際に私の役を私がやるといふのはどうだろう。それはもう神がかったできになるだろうな、自伝の

完成を急がねば。

まあ、簡単な自己紹介が終わったところで本題に移ろう。

私は今ある男をスト・・・追跡している。

彼は私が所属している探偵事務所の上司で2年前から私と共に難事件を解決へと導いた名脇役だ。

見た目は無精ひげを生やしたいかついおっさんだが的確なアドバイスとツツコミは目を見張るものがある。

私への暴言が玉に瑕だが・・・そこはよしとしておこう。

すると、彼が彼が一瞬立ち止まりこちらを向いた、が気づかれてはいないだろう。尾行術は得意中の得意だ、なんせ年中彼をスト・・・追跡しているわけだから。

彼はいつも通り朝会社に通勤している、遅刻ぎりぎりにもかかわらず急ぐそぶりも見せずならだらとしていたのもいつも通りだ。

きつと、二日酔いして起きれなかったのだろう昨日あれだけ酒を飲めば二日酔いにならないほうがおかしい。一応今に至るまでも経緯を推測すると、彼は目覚まし時計を反射的にとめた後2度寝にスムーズに入り1時間ぐっすり寝た後、寝ぼけた頭でケータイを見たら遅刻ぎりぎりじゃないか！と跳ね起きあたふたと通勤の準備をしているうちになんかもう遅刻してもいいやと開き直つてならだと不貞不貞しく家を出てわざとむと遅れようと歩幅を小さくしたりゆつくり歩いたり小学生並みのことを平然としながら遅刻した言い訳を必死に考えているといったところだろう。

私ほどの探偵になると人が考えていることもわかってしまうのだ。別に彼だからとかでは決して無い。

しかし、私の語りだけではわかりにくいだろうからここでつまらない情景描写でも挟むとしよう、まず私がどこにいるかという天下の桜田門の目の前、ランニングの名所と知られる皇居の歩道である。肌寒い季節を終え、暖かい日差しがほどよく周りを活性化させている今日この頃、それはまさに春の到来を告げていた。春は始まりの季節らしく動植物然りアスファルトで舗装された道路までも光り輝

かせる。

言っておくがここで単に日光が照り返しているだけでは？などと無粋なことを言っではいけないし考えてもいけない。ようは気分の問題なのだ、察して欲しい。

皇居周辺を走る女性の数が増えたのもその影響だろう、おしゃれなスポーツウエアを着た女性の群れが幾度も横を通り過ぎる。

私も欲しいなあなんて思うが、考えてみたら走る理由が無いから買っても無駄になるだけだと思いついた。まったく美人は損で困る。それにしてもいつの間にあんなおしゃれなスポーツウエアができたのだらう、最近やつとヒートテックの存在を知った私としては時代に置いてきぼりにされているような気分になる。・・・お分りのように私は流行には乏しい、友人の口から聞く肉食系女子達の盛りガルだか森ガールの単語を聞いただけで頭がくらくらする。人間は雑食だ、肉食動物には決してなれない、ビタミン不足で鳥目になるぞかと思うし、森ガールにいたってはエルフとかそういう感じ？か思った。

だが仕方が無い、探偵とは時代に取り残される者なのだ。おしゃれな探偵なんて箔がつかない、探偵は黙ってパイプ煙草に古臭いマントを羽織るのだ。

ついでに彼と私の距離関係について語っておこう、彼は私の10m先を歩いていて私は近くにあってた電柱に身を隠している。

電柱に隠れきれないが気配を隠せればいいのでよしとする。

あらためて言っておくが決して私は誇大妄想にとらわれた犯罪者とは違う、私は彼を見守っているのであって別に彼と彼とどうこうなりたいわけではないのだ。これは愛、生き辛い世の中を必死に生きていこうとする彼を助けたいという立派な愛なのだ。

彼がどうしても言うのならそれはもうやぶさかではないのだけど。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9738x/>

---

迷探偵 柏木 王木

2011年11月11日07時08分発行